

ずいそう

消雪パイプと雪国ライフ

金子 剛



雪が多く降る地域のことを「雪国」と呼ぶが、大雪が降る雪国で問題なく暮らせるよう、いろいろな工夫がされた雪国ライフを紹介する。

私が生まれ育った新潟県長岡市は新潟県で2番目に大きい市であり、日本三大花火の長岡大花火大会が有名である。花火ほど有名ではないが多い年は市街地でも1mを越す積雪がある。私が住む町は市街地から10kmほどであるが、山に近いせいか市街地の倍ほどの積雪に苦労しながら生活してきた。日本中が大雪に見舞われた昭和38年1月の38豪雪(写真-1)は記憶に残る人もいると思う。長岡市の雪は観測史上最高となる3mもの大雪に見舞われ市内は完全に雪の中に閉ざされた。

年齢がばれるが、幼い私は、この38豪雪をおぼろげに覚えている。1階玄関は雪面の遙か下、2階の窓からしか外に出られない状態が続き、休み無く深々と降り続く雪に子供ながら不安にかられたことを思い出す。この雪害が長岡市に急速に消雪パイプの普及を促す結果となった。

関東に住む知人が私を訪ねてくれた時、新幹線で真冬の長岡駅に降り立って開口一番「なんで道路からお

湯が噴き出しているのか？」初めて見た消雪パイプの印象である。私にとっては当たり前のことだが、温暖地に暮らす人は、とても不思議な現象らしい。消雪パイプとは、地下水をポンプでくみ上げてスプリンクラーのように散水させ雪を消す設備である。気温が零度前後のときでも地下水の温度は14℃あるため空気中の水蒸気が暖められ湯気になり、初めて目にする人はお湯が噴き出しているように見えたのである。

消雪パイプの発祥の地は長岡市である。発案者は元祖・柿の種で知られる浪花屋製菓の創業者の今井興三郎氏である。今井氏は周囲に雪が積もっているにもかかわらず、地下水の浸みだしている場所だけ雪が無いことに目をつけ、昭和30年に考案したとされる。今井氏は井戸から温かい地下水をくみ上げ長岡市の公道に昭和36年に消雪パイプの設置を実現させた。この2年後の38豪雪の年に消雪パイプを設置した3.7kmはアスファルト路面が現れたままで、消雪パイプの絶大な効果に誰もが驚いたと伝えられている。現在、市内の消雪パイプは、国・県・市に私有を加えると、総延長約960kmにもなり、いまでも伸び続けている(図-1)。



写真-1 昭和38年1月の長岡市内の様子
出典：ながおか防災ホームページ「38豪雪」より



図-1 消雪パイプの仕組み
出典：長岡市ホームページ「消雪パイプと地下水」より

平成の時代になり気温が上昇しているためか2mを超す雪はほとんどなくなったが、忘れた頃に大雪に見舞われている。最近では平成30年の北陸豪雪で福井・石川で記録的な大雪となった事は記憶に新しいが、雪の少ない新潟市でも同年1月12日に1日の降雪量が80cmを超えた。当然、我が町はその比ではなく一晩で150cmの降雪があり、関東にいる息子達に屋根の雪下ろしの為に駆けつけてもらい大いに助かった。ちなみに家にかかる荷重は湿った雪で1mの積雪荷重が300kg/m²以上にもなる為、家の倒壊を防ぐには雪下ろしが必要になる。

ここまで読んで頂いた方はなぜ住みにくい所に住んでいるか不思議に思われていると思う。確かに雪が降って喜ぶのは子供とワンちゃんだけであるが、私も子供時代は、雪の降るのを心待ちにしており、初雪が降れば雪だるま作りに精を出し、皆が集まれば二手に分かれて雪合戦が始まった。屋根には1mを超える雪が積もれば大人達は町中一斉に雪下ろしを行い、落とされた雪は小山ほどの大きさになった。それを利用

して穴をくり抜き、かまぐらの出来上がりである。七輪を持ち込み正月の餅を焼いて食べれば、極上のおやつであった。小学から中学にかけ半日程を使い裏山で行われたスキー授業は今となれば最高の思い出である。

大人になり冬の楽しみ方は視覚や暖をとる形に変わっていった。我が町、我が庭には毎年、素晴らしい四季が訪れてくれる。特に冬の夜に綿雪が深々と降り続いたあとの夜明けが、晴天であれば銀色の別世界が出現する。外が吹雪いていても部屋の中には暖かいコタツがあり、外の凍える寒さとのギャップは安堵感さえ感じるものである。愛猫は窓から吹雪く外を眺めて何を思っているのか…。

我が町内にも3年前から消雪パイプが設置され、冬の雪かきから少しかだけ解放された。鉛色の冬空をきれいと思ったことは無いが、春の息吹を待つ楽しさも雪国ライフである。

—かねこ つよし (株)加賀田組 舗道部—

